

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
Tel. 0463-59-4111 (内線 2200)

研究と趣味の狭間から

新垣 公弥子

本居宣長にはじまり、日本語において品詞という概念がまだ確立されていなかった頃、日本語の構造分析は外国語との接触により発展してきたといえる。江戸、幕末にかけて多くの外国国籍（以下外国人と便宜上表記する）の人々により日本語がアルファベット（ローマ字）で表記された。ローマ字は子音と母音で構成されているため、日本語の仮名よりも最小の単位に分析できるため、その音価を推定する上で貴重な資料であるということはいままでもない。こと『日葡辞書』においては当時の日本語の様子を垣間見させてくれるだけでなく[h]が立項されていないといった特徴があり、当時の日本語音韻体系には[h]音がなかったことを物語っている。『日葡辞書』にみられる音素について音価推定を行う場合、記述した者の母語の音韻体系、その干渉について平行して考察を進める必要があり、慎重に取り扱うことが大切であるが、音韻研究者にとっては無限の可能性を秘めた極上の逸品であることは間違いない。

時を経て、ポルトガル語に接する機会が現在は多くなってきた。日系の滞在ビザの改正に伴い、ポルトガル語を母語とする定住者が増えてきた。2005年度には本学にも学生として入学している。彼らをはじめ、日本語の上手な外国人が増えてきた。カンザス大学、ビクトリア大学からの留学生の中にも、プログラム初日に日本語による自己紹介をする光景がみられる。2007年度ビクトリア大学からの留学生に至っては、漢字圏の学生と同じクラスで日本語を学べるレベルに達していた。かつては大学でも五十音から教えはじめていたことが、にわかには信じられないくらい日本語学習者のレベルが世界的に向上していることを感じる。加えてノーベル賞の授賞式にて使用人口わずか1億人あまりの言語である日本語が世界に発せられ

たことは記憶に新しい。

日本語と欧米諸国の言語との違いのひとつは、いわゆる主語の有様によるといえよう。ポルトガル語で例を示すと次のようになる。

Eu sou professora. (私は先生です(女性の場合))

Ela e professora. (彼女は先生です)

つまりポルトガル語の場合[Eu]が決定されれば[sou]が決定される。また反対に[sou]が決定されれば[Eu]が決定される。決して動詞[sou]は主語として[Ela]を選択することはできない。よって「Eu () professora.」といった練習問題が成立するが、日本語の場合にはいわゆる主語と動詞が関係性を持たないので、上記のような練習問題は成立しない。これが日本語には主語がないといわれるゆえんである。

では、次になぜ私たちは「主語」という用語を用いているのだろうか。これは先にも述べたように本居宣長の時代には、日本語を分析する精密な方法を持ち合わせていなかった。そこで西洋の文法概念を取り入れたときに「私は山田です」も「私が山田です」も同様の「主語」として理解されたためである。しかし近年の研究では双方の違いは明確にされている。「誰が山田さんですか」という疑問に対して「私が山田です」と答えることができるのであって、決して自己紹介で「私が山田です」と用いることはできない。「私は山田です」としなければならない。「いつがいい?」「どこが痛い?」「誰が好き?」「何が食べたい?」のように疑問詞「いつ」「どこ」「誰」「何」には助詞「が」が後続する。「は」は決して後続できない。それゆえ「が」は「未知情報」を承ける助詞であり、「は」は既知情報を承ける助詞であるという違いがあり、双方は同じ機能を有する助詞ではない。

以上ふたつの見地から日本語のいわゆる主語について紹介した。日本語の魅力に魅せられた者として、その魅力を少しでも伝えられたであろうか。

(所員/あらかき・くみこ)

国経研フォーラム講演会

2008年11月21日(金)に6号館302講堂にて株式会社ミセスリビング代表取締役、NPO 法人次世代の家と社会をつくる会理事長の宇津崎光代氏と住育研究所所長の宇津崎友見氏を招いて「建築で世直しをしたいー母と娘で“住育”を提唱」のタイトルで国経研フォーラム講演会が開催されました。学生と一般市民約250名が、子育てや家事、介護の経験からひらめいたアイデアいっぱいの「お母ちゃんの家」、心と住まいの心理的な深いつながりについてのユニークな講演を熱心に聴き入っていました。今回の講演会の準備では経営学部松岡教授の献身的な貢献がありました。感謝いたします。

研究所発行新ジャーナルの経過報告

国際経営研究所の新しい試みとして、学内外の若手研究者、実務家、大学院生のための審査論文誌の発行準備を続けてきましたが、12月18日時点で、学内外から11本の研究論文の投稿を受理しております。これから2009年の1月から2月初旬にかけて審査委員により論文の審査をおこないます。審査プロセスでは、多くの経営学部の先生方にご協力を仰ぐことになると思います。よろしくお願いいたします。新ジャーナルの発行は2009年3月を予定しております。ジャーナルの編集委員長は小島大徳先生です。小島先生のご努力に感謝です。

2008年度インターゼミナール大会結果報告

11月19日(水)に第四回インターゼミナール大会が、55グループ、参加学生数216名で開催されました。経営・会計部門の最優秀賞は「ベンチャーキャピタル」(田中&小島ゼミ、代表:吉見直樹)、優秀賞は3グループ、「環境ビジネスにより広がる企業の可能

性」(田中ゼミ、代表:田丸和輝)、「四半期情報開示制度の意義と構造」(照屋ゼミ、代表:山本萌穂)、「会計基準のコンバージェンスと日本の対応」(照屋ゼミ、代表:佐久間貴大)が受賞しました。その他、奨励賞を5グループが受賞しました。

国際・社会部門では、「タラートいきる道〜タイの現地調査から〜」(メディア教材製作プロジェクト、代表:小暮貴恵)が最優秀賞を受賞しました。優秀賞は「ベビー用品企業」(アサモアゼミ、代表:古田部佳紀)、その他3グループが奨励賞でした。

新規事業計画部門の最優秀賞は「逃げられないCM」(青木ゼミ、代表:林 徹)。優秀賞は「WCビジネス」(青木ゼミ、代表:長澤大輔)、その他奨励賞を2グループが受賞しました。

経営学部のインターゼミナール大会も毎年規模が拡大し、発表内容も充実してきております。学生の努力とチームワークを発揮する舞台として、インターゼミナール大会はその機能を果たし始めています。

国際経営学会懸賞論文

2008年度の懸賞論文は153篇(研究論文部門104篇、研究レポート部門49篇)の応募がありました。研究論文部門での審査項目は、1)基本的体裁、2)理論的整合性、3)結論の明確性・妥当性、4)独自性・新奇性、5)総合評価の5部門、各10点、計50点で評価されます。研究レポート部門は、1)基本的体裁、2)テーマの内容の整合・充実と意見表明、3)努力度、4)総合評価、の4項目、計40点での評価です。2009年1月7日(水)締め切りの2次審査の結果をもとに、6名の審査委員にて最終審査の結論が出されます。

イスラーム美術と日本

阿部克彦

今日ほどイスラーム世界に関する情報が必要とされる時代はなかったと言える。しかし一口にイスラーム世界と言っても、そのあまりに多様な民族、言語、歴史を有する人々をひとくくりにはできない。また、その15億人とも言われるイスラーム教徒が共有する価値観や世界観を理解するだけの知識の蓄積を日本人が有しているとは言い難い。

私がイスラーム世界に興味をもっていた大学生の頃、一般的にイランやエジプトといった国はるか遠い未知の国で、石油以外は日本に一切関係ない国であるかのように受け取られていた。それだけでなく、日本の美術史学でも、イスラーム世界の文化や芸術に関心をもつ研究者は稀で、現在でも「イスラーム美術史」は広く認知されているとは言い難い。ところが、「イスラーム美術史 (Islamic Art)」は、欧米では確立された美術史学の一研究分野である。そして近年では、中東諸国でも、イスラーム世界が生み出した優れた芸術作品を収集・展示しようとする動きが活発で、ペルシア湾岸の資源国カタールでは、昨年12月にイスラーム美術の名品を集めた新たな美術館がオープンしたばかりである。欧米におけるイスラームの美術品収集は、19世紀以来活発で、パリのルーブル美術館をはじめ、ロンドン、ベルリンでもイスラーム美術は大きな位置を占めているし、カナダのトロントでもイスラーム美術の優秀なコレクションとして知られるアガ=カーン・コレクションを収蔵する美術館の建設が始まっている。

これらの動きは、イスラーム美術が西洋美術や中国美術などとならんで世界美術の重要な一分野として認識されていることを示している。これに対して、日本における「イスラーム美術」研究は、未だその端緒にすぎたばかりで、講座を開設する大学も2、3校を数えるのみである。また2005年10月には、東京の世田谷美術館で、ロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館所蔵のイスラーム美術展が開催されたが、この展覧会は、イスラーム美術の様々な特徴を、時代、地域を限定することなく網羅する我が国初めての展覧会であった。

近代まで、日本と中東が直接交流することはなかったものの、間接的に文物を通して触れ合う機会があった。私が研究対象とする17世紀のイランは、サファヴィー朝のもと、主にオランダの東インド会社による交易を通して、遠くヨーロッパや中国、そして日本とも交流をもった。中国の明・清の陶磁器と共に日本の伊万里焼もイランに運ばれ、イランの絹織物は大名たちによって大いに珍重され、名物裂として茶の湯の世界で用いられた。これらの布は、世界でも現存例が少なく、17世紀イランの染織史を知る上でまたとない史料であると同時に、我が国と「イスラーム美術」を結ぶ歴史上の証人とも言うべきものである。この史料の分類と分析による全容の解明が、日本におけるイスラーム世界のより深い理解と相互の関係発展の一助となることを願うものである。

(所員/あべ・かつひこ)

研究余滴

第4回サロン de WINE シンポジウム

本誌前号で、『バルコニーから観る〇〇〇の風景—気づき、異なり、発見』（主催：サロン de WINE）を知り参加した。シンポジウムは、海老澤教授の問題提起からはじまった。「社会には複数の組織があり、それぞれが相互に関係づけられている。」この言葉がとても印象的だった。昼・夜また平日・休日また職場、趣味の世界、家庭などと異なった自分がいる。時に中心的な位置に、またある時には周辺、裏方的な位置にいる。それは、同じ人間でありながら、違う観点から自分を発見することを日常的に展開していることになる。

早稲田大学山田真茂留教授の基調講演では、「普通とはなんぞや！」を考えさせられた。今日ほぼ毎日といっても過言ではない想像を絶する数々の凶悪な事件。目を背けたくくなるようなこれらの事件とどう向き合っていけばよいのだろうか。不信感や他者への警戒心は、ますます強さを増しているのではないかと考えさせられる。「空気を読む」と「場を弁える」の個別的状況の違いについては、大変興味深く自らの日々を振り返る示唆となった。また、頻繁に見かける車内で化粧をする行為について、公的空間よりも私的空間の方に気をつかう考え方だという指摘には、なるほどとうなずいた。

(株) 横浜赤レンガ前代表取締役社長村澤彰氏の話にも引き込まれた。氏は創業の準備の手始めに、夕暮れの赤レンガ倉庫を前に「赤レンガは自分に何を欲しているのだろうか」と自問を繰り返した。そして、徹底してその歴史を調べ、特に、その建築に携わった関係者については尊敬をもって調べ、その語ることに虚心に耳を傾けたという。

一方商業テナントの誘致にあたってはゾーンごとのイメージ図を示す代わりに、あえて

詩のような文章に託して空間のイメージや雰囲気やテナント企業側に伝え、深層心理に訴えることに成功した。現在では、種々のイベントで常に主役の位置を保っている。オープン当初3年間は赤字続きであったけれども、現在では年間500万人の人が訪れるという。

北海道工業大学湯川恵子准教授の話は、女史が平塚から北海道に就職しただけに平塚がどう見えるかという点にフロアーの関心が集まった。企業が地域で生き活きと経営するためには、労働力や用地という定量的な経営資源のみに着目した立地戦略から文化や風土など定性的な経営資源に着目する共生戦略への転換が重要だという指摘をされた。

文化風土的異なりによる地域企業間の連携による付加価値創造が新たな経営課題になってきた。「気づき」と「異なり」を前提とする自社経営資源の棚卸、そして企業間の社会資源化を目的とする連携相手の発見の大切さが述べられた。

4人のお話は「私自身が今社会の中で置かれている立場をバルコニーからつまり異なった空間から再確認する」点で共通していた。当事者として参加している自分を含めた状況全体をもう一人の自分が観察するという生活姿勢をもつことの大切さである。その姿勢が文化や社会そして自らの足元をもしっかり見詰め直すことになる。

会場には100人を超す参加者があった。ある種の緊張感をたたえながら話は進行し、その話の内容が数多くの質問者の心を動かして熱気のある質疑応答が繰り広げられた。関係者の日々の学習効果が感じられる爽やかな会場のエートスが良質の雰囲気醸し出していた。

(客員研究員／はぎわら・とみお； 湘南ひらつかキャンパス図書室／ほり・たかこ)